

新得の地名・呼び名集



十勝川左岸火砕流大露頭（通称：クッタリガンケ）
十勝岳火山群を水源とした流水が大地を侵食して作った川崖で、岩松から屈足付近で見られる。

北海道の地名は、もともとアイヌの人たちによって使われていた言葉が、そのまま今日まで使われているものが多い。本町も例外ではなく、移住団体の入植後に新しく命名された福山、広内、岩松など一部の地名を除けば、山も川もすべてアイヌ語地名がそのまま、あるいは漢字に置き換えられて使われてきた。アイヌ語地名は、自然の造形、地形、河川、動植物の状態を言葉に表わしたものが大部分をしめ、和訳すればすぐさま理解できるような地名が多い。それは、アイヌの生活に必要な場所を表わすものであったからといわれている。中でも、川を意味する“ペツ(ベツ)”と“ナイ”の地名がたいへん多いのが、北海道地名の最大の特徴だと言われている。なお、地名によく出てくる“ペンケ”“パンケ”は、それぞれ川上、川下の方を意味し、“ポン”は小さいの意である。

ここで本項は、「新得町百年史」のほか、郷土研究会独自で収集したものを収録した。

地 名 新得(シットクナイ、シントコ)

所在地 北海道上川郡新得町(東経142.50.33 北緯43.04.39)

明治32年(1899)、山形県北村山郡高崎村(現東根市)の村山和十郎を代表として、村形三吉ら13名によりこの地の開拓が始められ、以来113年の歳月が流れた。面積1,064.01km²、東西に30,760m、南北に62,290mで町の面積としては全国第26位。北方に大雪山国立公園とトムラウシ山(2,141m)、西方に日高山脈、母なる川十勝川と佐幌川が流れ、自然に恵まれた大森林帯を有し、JR根室本線と石勝線が結び、国道38号線が通っている。

地 名 新 内(ニウンナイ)

所在地 新得町字新内(本町西北部)

明治34、5年(1901～2)頃鉄道建設が行われ、線路の枕木などの木材や、同擁壁などの石材の生産が盛んになってくるほか、明治36年(1903)には農地の開拓が行われていった。すぐ裏手には佐幌岳を配し、西には狩勝峠を控え、スキー場に加え、リゾートホテルやゴルフ場、梅園などがある。

地 名 屈 足(クッタラウシ)

所在地 新得町字屈足(本町東部)

行政区画として本町を含め、河西(十勝)支庁下にあり、人舞村(現清水町)の管下であったが、人口の増加などにより、大正4年(1915)4月人舞村から分村して二級町村屈足村が誕生し、庁舎は同6年(1917)新得1条南3丁目に新築された。屈足地区の開拓は、明治35年(1902)春からで、入植により戸数が増えるにつれ、水稻の栽培も次第に盛んになっていった。十勝川上流部の森林開発、電源開発ひいてはトムラウシ温泉の開発も相乗するに至った。大正12年(1923)4月一級町村新得村の発足により、新得村字屈足となる。

地 名 佐 幌(サウロ)

所在地 新得町字上佐幌(本町東部の高台)

明治33年(1900)から開拓が始められ、屈足と本町の間に位置する台地で、南から北に向け展開しており、西側には佐幌川、東側に十勝川が流れている。この佐幌高台は、人舞村(現清水)の管内であったが、屈足村(現新得)が分村された時、上佐幌は新得に下佐幌は清水の管内に分かれた。のちに下佐幌の一部は、新得に編入されている。

地 名 福 山(トンネル沢)

所在地 新得町北西部の日高山脈山麓

明治34年(1901)から鉄道の建設工事が、狩勝峠を中心として施行され、大小のトンネル工事は山間部のため、非常に困難を極めていた中で、この地をトンネル沢、または墜道沢とも呼ぶようになった。

ちょうど狩勝峠の直下で、明治39年(1906)から開拓が行われた。入植者は、福島県人と山形県人が多いことから、一字ずつをとって福山になったという。

地 名 広 内(ヒロウチ)

所在地 新得町郊外西側一帯の日高山脈山麓

明治33年弘内豊美の名義でシントク西2線から西3線にかけ貸付許可を受け、小作人として大原利三郎らが入植していたので、弘内農場と呼ばれていたが、開拓が進まないため、後に返還している。この農場名が、広内の地名として引き継がれている。一方、アイヌ語の「ピロチ・ナイ」(崖の・ある川)という説もある(十勝地名解)。明治42年(1909)に新たに12戸が入植し開拓が進められ、次々と入植者が増えていった。

明治32年(1899)、オダッシュ山と臥牛山の間を抜けて、帯広方面からの石狩道路が出来、パンケシントク駅通所が設けられ、その後学校も建設された。

昭和22年(1947)、北海道農業試験場畜産部の移転がこの地に決定、後に北海道立総合研究機構畜産試験場となった。

地 名 カムイコタン(羊古志潭)

所在地 南新得、清水町との町界付近

佐幌川の清流が清水町の境に入ろうとするあたりの溪谷。カムイ(神の)コタン(いるところ)と言われ、巨岩相重なり、流れが白煙をあげて砕け散り、周辺の自然とともに景観美をなしている。

清水町側に「羊古志潭」の案内板が建てられている。

地 名 番外地(元町)字上佐幌西4線36番地一帯

所在地 市街地北部(佐幌川が区切る)

新得市街は、新得駅前と新得坂(佐幌6号の坂)のふもとから発展していった。佐幌地区、屈足地区の開拓に相俟って佐幌6号道路の交通が激しくなり、村形三吉が住む元町付近には人家が建ち並び、飲食店なども出来、活気がみなぎり、三吉村、三吉市街ともいわれるほどであった。大正3～6年(1914～17)頃には、雑穀景気が急上昇、木材も値上がりして、屈足、鹿追方面から来る荷馬車が絶えなかった。

この村形三吉は、新得開拓第1号の一人である。

地 名 牛乳山(兎ヶ丘)

所在地 新得山(通称神社山)に連なる西側の山塊

標高480.3mの小高い山で、始まった時期は不明だが、町営の新得牧場として牛馬の放牧場に使われていた。また、昭和10年(1935)頃の冬は、スキー場として町民に広く利用され、スキー大会も行われていた。

地 名 オダッシュ山

所在地 新得6号道路突き当り

標高1097.7m。西に連なる日高山脈の山並みの中で、三角形の優美な姿を見せ、そこより広内地帯の広がりがあり、誰もが見上げるわが町のシンボルである。名前の由来については定かでないが、アイヌ語と考えられる。秋には町民のオダッシュ山登山の行事もあり、親しまれている。その北側の鞍部に続いて、牛が寝ている姿の臥牛山(1,023m)がある。

地 名 増田山

所在地 西方臥牛山の麓

標高426m。広内地区西部の一角に立つ小高い山。昔は「藤谷の山」と近在の農家の人々と呼んでいた。

昭和21年(1946)、町が北海道農業試験場畜産部の移転用地に広内地区を選定した時、北海道庁長官増田子七氏をこの山に案内し、裁断を仰いだ経緯があることから、増田山と呼ぶようになった。

山頂には、句碑2基が建っている。

地 名 タッコピ山

所在地 オダッシュ山に連なる南の山塊

標高353.2m。広内南部パンケオタソイ川に張り出す小高い山。アイヌ語の「タプコプ 小山」からきている。すぐ近くに大正4年(1915)9月、共同墓地として認可が得られた新得墓地があり、古老は「わしらは、いずれタッコピ山のお世話になるんじゃ。」と話していたと言われる。

通称“墓地の山”と言われている。

地 名 狩勝峠

所在地 北西部に位置し、標高644m

明治40年(1907)9月、幾多の犠牲の中に官設鉄道十勝線(当時)が開通したが、それに先立ち、鉄道敷設調査のため現地を訪れた、初代北海道鉄道部長田辺朔郎が「狩勝」と命名した。

道央と道東の掛け橋になっているこの峠は、その後に完成した国道とともに交通の要所であり、昭和2年(1927)6月には日本新八景に当選するなど、景勝地としても名高い。

この下部、約100m程のところに954mの狩勝トンネルがあり、SL2輦で登坂していた姿も、昭和41年(1966)10月の新狩勝線への営業切り替えで今はなく、車窓からの眺望がなつかしい。

峠には、野原水嶺の歌碑、十勝小唄、日本新八景入選功労者顕彰碑、鉄道職員殉職者を祀る地蔵尊などがある。



地 名 パンケ山

所在地 字屈足北部

標高540.6m。屈足に住む人々にとって、この山はシンボルといえるだろう。古くはモイワ(小さな山)ともいわれ、アイヌにとっては、その風格から霊山と思わしめたに違いない。パンケニコロベツの山だったため、いつしかパンケ山と略された。学童の遠足などにも利用された。現在、山砂利の採掘がされている。

地 名 ウエンシリ及びカムイロキ

所在地 字屈足十勝川左岸に続くガンケ

十勝川の左岸にあるガンケは、屈足地域のもう一つの象徴となっており、アイヌは、それをウエンシリといった。ウエン(悪い)は、ピリカ(美しい、よい、美味しい)の反対語である。川岸は断崖絶壁状になっていて、通行は不可能である。このようなことから、ウエンシリといわれたのであろう。

また、カムイロキは、ウエンシリから3キロメートルほど上流にあり、アイヌ語で「神様が・お座りになっている・ところ」の意味。熊の越冬するところともいわれ、十勝川筋の霊地であったといわれている。

地 名 オソウシ温泉

所在地 字屈足

オソウシ川の上流部にあって、道道忠別清水線を岩松発電所を過ぎ北上すると、右側に「オソウシ温泉鹿乃湯荘」大きな看板が目に入る。右折して橋を渡り、オソウシ川沿いの深い沢すじを約7km進むと鹿乃陽荘に辿り着く。この温泉は、明治末当時帯広駅前で「北海館」を経営する小泉碧がアイヌに教えられて開いたとされ、経営者も数回代わりながら現在に至っている。オ・ソ・ウシ・イで、オは川尻、ソは滝、ウシはある、イは物(川)で、滝がある川の意味のようである。

地 名 岩 松(イワマツ)

所在地 字屈足岩松

この地区の開拓は、明治43年(1910)3月徳島県の松浦金平と岡山県の岩野伊平、岩野浅次郎らによって始められ、地区の名称は、両者の頭文字をとって名づけられたものである。

また、この地区には数本の川があり、大雨のたびに洪水に悩まされてきた。柏、檜などの資源が豊富なため、炭焼きが盛んに行われていた。

昭和13年(1938)には国をあげて非常時の体制に入り、翌14年(1939)十勝水系では最初の電源開発として、ダムの建設が始まり、幾多の犠牲を払いながら、昭和17年(1942)1月に1号機が完成し、翌18年(1943)1月にすべての工事が終了、最大出力12.600kw発電が開始された。

かつては、王子製紙の職員派出所や下請の中村組の事務所、宿舎等があり、流送の網場があった。

地 名 トムラウシ(富村牛)

所在地 字屈足トムラウシ

トポンラウシまたはトンラウシといい、トポンラまたはトンラは水澱(おり)を意味し、川底に水澱があるところを、トポンラウシまたはトンラウシといったと思われる。

松浦武四郎は、トンラウシと記している。戦後、学校名は当時の十勝支庁長寺田真一が、「富村牛」の漢字を当てて使われるようになった。開拓農家のみでなく、林業に関わるほか、電源開発、道路の開削によって、昭和40年(1965)からトムラウシ温泉へのバス運行により、利用者や登山者も年々増加していった。



地 名 ニペソツ(トムラウシの中心地)

所在地 字屈足トムラウシ

ニペソツ山(2,012.7m)から発するニペソツ川が十勝川に注ぐあたりに、昭和21年(1946)3月戦後入植者第一陣として3名が選ばれて開拓に入った。順次開拓者の戸数も増加し、キナウシ、ニペソツ支流、パンケベツ、ペンケベツさらにチカベツと範囲が広まり、開拓集落もでき、学校が建つまでになった。これより先、大正6年(1917)豊富な国有林の立木売り払いがなされ、王子製紙(株)による木材の流送が始まり、馬車軌道、そして森林軌道と時代が移り、営林署の建設、北電社宅、森林鉄道の施設などが設けられ、地域の開発に大いに役立ったのである。

地 名 千間坂(センゲンザカ)

所在地 新屈足から屈足へ通じる坂道

新屈足へ入植した移住者たちにとっては、新得市街へ通じる重要な生活道路であった。新屈足から屈足23号付近に設けられていた渡船場までの坂道で、雨期や雪解け時期にはぬかるみとなり、悪路の道のりが長く感じられたため、この名が付けられたのであろう。生活の歴史上で忘れられない地名になっている。

地 名 大カーブ

所在地 岩松からニペソツへ至る

岩松ダムから中土場のほぼ中間に当たり、この区間で最も山の出っ張りの大きいところ。木材輸送の馬車軌道(馬鉄)や、その後の森林鉄道(林鉄)のため、トンネルも掘られた。

地 名 中土場

所在地 現十勝ダムの下手の十勝川右岸

かつて王子森林鉄道時代は、上流より流送されてきた木材の水切り集積所であった。王子製紙下請けの中村組造材部の基地となり、森林鉄道の駅土場として活気を呈した時代もあった。

昭和16年(1941)、岩松ダムの築堤工事によりここに土場が移転されたものである。

地 名 弁天岩

所在地 現十勝ダムの直下、左岸

十勝ダム直下の公園あたりで、十勝川に侵食されずに残った島があった。島の頂部には、桜、つつじ、しゃくなげ、松などが生え、山の人たちの心をなごませた。このあたり青みを帯びた岩肌が、十勝川に突き出している。

地 名 赤 岩

所在地 貴名牛神社の礎岩の底部(東大雪湖の湖底)

十勝川の木材流送の最難所。両岸、川底すべて岩盤で、本流中最狭部で、川底の岩が赤い色をしていた。

地 名 不動の滝

所在地 新得広内狩勝山すそ

パンケシントク川の上流。JR根室本線新狩勝トンネル入口付近を横切って進むと、幅7m、高さ約20mの滝に辿り着く。黒い岩肌に白く泡立って流れ落ちる水の清らかさは、周囲の景観とともに幽仙狭の思いである。

また、この滝の名称は、明治34年(1901)山形から移住した、大内吉平一家の信仰の生活によってもたらされたものである。身体の不自由な二男を神仏の加護を信じ、「不動尊を祠るように」とのお告げにより、滝壺の近くに祠を建て、不動明王を祠り修行したことから、その名が付けられた。

地 名 石狩道路

所在地 新得広内、オダッシュ山と臥牛山の鞍部

開拓当時の道路といえば、草分道で、かろうじて人馬が通れる程度に過ぎず、輸送のほとんどは水路に頼られていた。十勝で本格的に道路工事が進められたのは、明治25年(1892)の大津、茂岩、幕別、帯広、芽室を経て、新得に至るというもので、6工区に分けて計画され、この土工に北海道集治監(現在の刑務所)の囚人たちがあてられた。

しかし、芽室で予算を使い果して明治26年(1893)工事が中止となり、5年後の明治31年(1898)に再開された。芽室から清水(石山)を抜け、新得の西7線あたりから山沿いに入り、町道8号線の延長線上から鞍部を抜け、南富良野串内に通じ、旭川へと結ぶもので、翌明治32年(1899)には完成している。ちょうど新得の開拓が始まった頃であり、開拓移住者や郵便物、荷物などの便宜から、明治32年8月、パンケシントク駅通所(後の新得駅通所)が、国費で設置され運営された。

昭和6年(1931)に新内・落合間の道路が完成し(昭和9年国道に編入)、この道路の使命を終えたが、今もその跡形が残っており、当時を偲ぶことができる。

地 名 旧国道38号線

所在地 本町市街の本通及び現国道38号線

明治35年(1902)橋井弥兵衛により、基線3号から6号にかけて道路が開削されたのが、38号線のはじまりである。後年、村道として新内まで延長、昭和6年(1931)帯広土木事務所の直営で、新内・落合間の工事が開始され、同年11月に完成をみている。これにより19号より新内付近のルートは、現在とは大分違っているが、道東と道央及び道北との交通の要所となった。

また昭和2年(1927)6月狩勝峠は、日本新八景に見事入選し、景勝地として全国的にその名が知れ渡ることになり、さらに国道開通の喜びを記念して、町内青年団が昭和7年(1932)5月から2年間をかけて沿道に桜の木を植えた。現在では老木となったが、毎年5月下旬には、桜の花が見られる。

地 名 学園山

所在地 新得町広内 臥牛山

この山は新得小学校から近く、不動の滝もあり、かつては遠足や高学年のマラソンなどにも利用され、また山麓には学校林もある。教職員の間でも評判の山で、職員会議で「学園山」と名づけられ、新得町教育研究会の「郷土研究」昭和13年(1938)にその名を見ることができる。

地 名 藤越道路

所在地 道道新得本別線の新得坂から左折、上佐幌高台へ通ずる斜めの道路

明治33年(1900)、徳橋清助らによって佐幌高台の開拓が始められ、39年(1906)頃まで逐年入植されてきたが、終戦を契機として、自給食料の確保と海外からの復員、引揚者の受け入れに、北海道内の国有未開地開放が国策として打ち出された。そのため、上佐幌の防風林にも入植があり、先ず開拓農道の開削が施行され、幅員4mの開拓農道工事が、開拓者を中心に進められた。

しかし、この用地は開拓者自らはもちろん、一般関係地主の協力、無償提供によるもので、昭和26年(1951)に4,199.4mが完工、後日町道に認定編入され、改良管理が加えられており、開拓農協(開拓者)が後世に残した大きな財産といえよう。なお、この道路の必要性を熱心に運動した、開拓農協組合長の藤岡繁春氏と大越某氏の一字を取って「藤越道路」と長老の長岡氏が名付けたと地域の人は言っている。

地 名 旧狩勝線とSL(D5195号)

所在地 新得山スキー場入口

旧狩勝線は、昭和41年(1966)10月廃止されたが、翌42年(1967)7月からは、新内・新得間が実験線として貨車の脱線、列車火災などについて、種々の条件設定の中で実験が行われ、貴重なデータが得られ、国鉄の基準作成が整えられた。しかし、昭和54年(1979)8月に実験線は目的を果たし、廃線となった。その後、新得町は平成元年度、この用地を買収し、レールや枕木を撤去、開削するなどして整備し、現在では「狩勝ポッポの道」として再利用されている。また、かつての国鉄時代、狩勝越えの客車や貨車の輸送に活躍したSL(機関車D5195号)が、昭和49年(1974)9月に新得山スキー場入口に設置され、この周辺も公園化するほか、沿線には飲食店や薬草温泉などもあり、将来的に明るい展開が期待できる。



参考文献: 新得百年町史